

海岸線の現在

―首相官邸の窓から見えたもの―

評論家、作家、麗澤大学教授

松本健一

- *岩沼市長の話―塩づけの田
- *東北では金や銅がとれた
- *廃鉱で鉱山労働者が水田開発
- *「事件は現場で起こっている」
- *水深20メートルの港
- *神戸も香港も仁川も同じ地形
- *ペリール艦隊の大砲と幕府の大砲
- *外へ出る力、内に蓄える力
- *東日本大震災の責任の問題
- *日本人は山から下りてきた



浅野 開会いたします。（拍手）今日はおなじみの松本健一先生をお迎えしました。海岸線の話は厳密にはこれが2回目で、去年は地震の話があり、その前の年は『海岸線の歴史』が出版されたところだったので海岸線をめぐってお話しいただいています。

今年、『海岸線は語る』という本を出版されたのですが、松本さんがずっと考察してこられたことが、大震災の被害を受けた海岸線へ行ってみるといちだんとはっきりとわかってくる、そしてそれを復興にどう生かすか、という内容になっていきます。

松本 健一
ということで、松本さんの話はいつも面白いですけれども、今回も面白かったらご本をお買

思いますので、お申し出ください。それでは松本さん、よろしくお願いいたします。（拍手）
松本 松本健一でございます。だいたい6月から7月にかけて毎年お話をするという形で、もう7年ぐらい、こちらでの講演が続いているのではないかと思います。

『海岸線は語る』という本を3月の末に出しました。2年半前に『海岸線の歴史』を書いたのですけれども、昨年3月11日の東日本大震災の1週間後に、私が、全国的な復興ビジョンと各地に合った復興計画を立てなければいけないという形で、当時の菅首相にプランを出したわけです。

それまでは、海にコンクリートの防波堤をつくるといっただけの発想で復興構想が言われてい